

【展示報告】

大学史特集展示「ゴガクのヨコセン！

—横浜専門学校の語学教育—について

大坪 潤子

はじめに

神奈川大学の前身である横浜専門学校（通称「横専」）は、国際的な貿易港をもつ横浜という立地条件から、世界へ通用する人材の育成をめざして語学教育を充実させていた。その内容は当時としては先進的といえる実用性重視のもので、横専生たちの語学力は社会でも高く評価された。

神奈川大学資料編纂室が主催する二〇一七（平成二十九）年度の大学史特集展示は、横浜専門学校における語学教育が実際にどのようなものだったのか、現在判明しているカリキュラムや教員の顔ぶれ、学生が使用した教科書などの資料から探るものとした。

同展示は、十月六日（金）から十二月二十六日（火）までを会期とし、横浜キャンパス三号館展示ホールで

開催した。ホール内にある大学史展示部分の一角に常民文化研究所から借用した展示ケースを設置、教科書等の実物資料を展示した（表2・展示資料一覧参照）。また展示ホールの外側（三号館吹抜側）の可動壁面にA1サイズのパネル十枚を掲示した。パネルでは横浜専門学校の語学教育の概要を解説、また、三名の教員をピックアップして紹介し、卒業アルバムの中から英語、スペイン語、フランス語の教員と学生の集合写真を拡大展示した（写真1〜3）。また、語学教育にかかわる当時の証言や回顧を抜粋して示した。

本稿は、展示の内容に沿って本テーマを概観し、今後の課題等について考えるものである。

一、横浜専門学校の語学教育

横浜専門学校の語学教育は、学校設立の翌年・一九

三〇（昭和五）年に設置された貿易科において特に充実していた。貿易科で第一外国語の英語に第二外国語を加えた時間数は、総授業時間の約36%にあたる。これは例えば東京外国語学校の64%には及ばないが、語学を重視した拓植大学の専門部（22%）や、貿易実務者育成にも力を入れていた官立の横浜高等商業学校（29%）よりも高い割合であった<sup>1)</sup>。

また、読解や訳文に重きをおいた当時の（旧制）大学での教育とは異なり、三年間で社会に、そして世界に通用するスキルを身につけるため、会話や即席スピーチ、ビジネスレター、英文簿記など、実用をめざす徹底した指導がおこなわれた<sup>2)</sup>。

そこには個性あふれる教員や、それに応えた学生たちの懸命な姿があった。

#### （1）英語

英語は、一九四二（昭和十七）年に貿易科の第一外国語が英語または「支那語」（中国語）とされるまで、横浜専門学校での語学教育の基本科目だった。その担当教員は、外国人講師を含めて約七十名の存在が現在確認できている。

英語教育は貿易科と高等商業科において特に重視され、組織的に指導がおこなわれた。そこできわめて強い指導力を発揮したのが、一九三六（昭和十一）年に着任した江本茂夫（詳細後述）である。これ以前は、東京商科大学（現・一橋大学）専門部の教授でもあった五味赫<sup>あきひろ</sup>が授業中に江戸っ子口調で駄洒落を言うこともあったようだが、江本が主任教授となつてからは英語の授業は全て英語だけを使うことが求められた<sup>3)</sup>。試験も英語による設問や口述に英語で解答するもので、英文和訳は殆ど無かった。また毎年二回、夏冬の休みに入る前には「各組対抗英語即席演説会」が開催され、法学科以外は全科これに参加した。内容は各学級で英語の成績順に番付けをして約十名を選手として選出、対抗する学級の学生と壇上で英語の即席スピーチを競うもので、優秀な学級は学校から表彰された<sup>4)</sup>。さらに、学外での大会にも頻繁に参加し、優秀な成績をおさめている（表1・年表参照）。

このほか江本を中心とした徹底指導により、実践的な英語力を身につけ、卒業後に外務省、商社、銀行などに就職する学生も少なくなかった。

## (2) 第二外国語

横浜専門学校での第二外国語は、時期によって違いはあるが、設置当初の校則によればフランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語、ロシア語、オランダ語の六か国語がおかれ、これが最多である。ただしこのうちロシア語、オランダ語については実際に授業がおこなわれたことを示す記録を現在見出せていない。

中南米諸国との貿易に必要となるスペイン語や、工学三科で必須とされたドイツ語など、第二外国語も実用性を重視し会話に力を入れていた。それぞれ、授業だけではなく部も創立されて活動し、「西班牙語部」は南米からの留学生と交歓会を開催、「支那語」研究を中心とした「東和会」が『東和』を、英語部が『英語会雑誌』を刊行するなどした。一方、一九四一（昭和十六）年度の仏蘭西語部には新入生の入部が無く、一九四三（昭和十八）年の教務委員会ではスペイン語を廃しマレー語を採用することが議題になる（結局採用されず）<sup>6)</sup>など、その位置付けは時局を反映するものでもあった。

なお、多種多様な経歴をもつ英語担当の教員に比べ、第二外国語の教員は東京や大阪の外国語学校の出

身者が多い傾向にある。

## 二、教員のプロフィール

横浜専門学校で語学を担当した教員は、現在資料から判明する範囲ではおよそ百名におよぶ。しかし在職期間はおろか氏名すら判然としない人物もいて、全容は明らかでない。その中で本展示では、教員それぞれの人となりを探る入口として、横専の語学教育における最大の立役者というべき江本茂夫、同じ英語の教員から、最近の調査により興味深い経歴が判明した三浦運五郎、ドイツ語教員として学生に慕われつつも天逝した馬場久治の三人をピックアップしてプロフィールを掲示した。

(1) 江本 茂夫（英語）（一八八八—一九六六）

在職期間一九三六—一九四一

陸軍軍人として英語やフランス語、ドイツ語を身につけた江本茂夫は、陸軍士官学校などで英語を教えたのち、一九三六（昭和十一年）、横浜専門学校の英語主任教授になった。

「マシガン・スピーチ」と呼ばれた江本の早口の英語の授業は、日本語を一切つかわないもの（直接教授法）で、徹底的に聞き、話すことが重視された。学内はもちろん学外で出会っても、江本との会話は全て英語だったという。週の授業数は三十一コマであったが、毎週二回放課後（最低二時間半）課外クラスもおこない、これはのちに「英会話特別指導科」として随意科目となった。そのほかに希望者のために自宅で英語研究会を開催したり、春夏冬の休暇中も一日も休まず英語を指導したりという熱血漢であった。たとえば夏は六十日間毎朝四、五時間徹底して指導をおこなったという。その成果は英語教育界でも高く評価され、江本の指導を受けるために横浜専門学校を目指す者もいた。軍人らしく規律を重んじたが、その熱意は多くの学生を惹きつけ、結果を生むものだった。ただし江本にとっては英語をマスターすることが到達点ではなく、英語を通じた人格の修養と人物の向上が目的であった。また、英語部のみならず仏蘭西語部や独逸語部の部長もつとめている。

着任後わずか五年で再び召集され、函館俘虜収容所所長となるが、その英語力と国際感覚によって連合軍

捕虜の厚い信頼を得たことでも知られる人物である。<sup>(2)</sup>

(2) 三浦 運五郎〈英語〉(一八九五?—一九八四)

在職期間一九三八—一九四六

三浦運五郎は少年のころ単身で故郷仙台を出て、横浜から航路、父の移民先であるカリフォルニアに渡った。初めは英語が解らなかつたため小学校から教育を受け、カリフォルニアのポモナ大学を卒業。次いでハーバード大学大学院商工経営管理研究科に進み、自由闊達な空気の中で過ごした。ニューヨークの商社に一年間勤め、帰国して東北学院の教授となったのち、一九三八（昭和十三）年に横浜専門学校に着任する。

横浜専門学校では教授として貿易実践や商業英語の講義を担当し、江本茂夫や緒方秀穂（ウイリアム・イングロット）らと共に英語教育の充実に寄与した。絶えず最新の英語表現を研究し、指導はやはり実践・実用を重視したものであったという。

『東北学院百年史』によれば、戦時中は米軍放送の聴取にも従事しており、戦後は東京裁判での通訳を依頼されるが、その役目を嫌い断わったという。その

後、横浜専門学校も辞して再び仙台に戻り、東北学院大学教授および日本時事英語学会の東北支部長として、晩年まで英語に関わり続けた。

(3) 馬場 久治ひさし〈ドイツ語〉(一九〇八一—一九四一)

在職期間一九三八—一九四一

ドイツ語は、横浜専門学校で一九三九(昭和十四)年に設置された工学三科(機械工学・電気工学・工業経営)の必須科目だった。ドイツ語担当教授の馬場久治は、その前年に講師として着任した際にはドイツ語を学ぶ学生は極めて少数で、貿易科では一クラスに数名だったが、その後貿易科でも高等商業科でも多くなった、ドイツ語およびドイツ民族への関心が高まってきたと述懐している。<sup>(8)</sup>その背景には、工学系ではドイツ語が重要であっただけでなく、当時第二次大戦で優位にあったドイツと日本との協定関係もあったと考えられよう。

横浜専門学校でのドイツ語教員は、現在のところ馬場を含めて草薙正夫、勝静夫など十二名が確認できるが、語学だけでなく法律や哲学も担当したり、文学へ

の関心が高かったりという教員が散見される。

馬場は富山県の実業家の家に連なり、京都帝国大学文学部でドイツ文学を専攻して卒業したのち横浜専門学校へ着任する。以後横浜の地をどこよりも愛し、学生にも慕われていた。病氣療養のため故郷へ帰る直前に満三十二歳の若さで亡くなるが、横浜専門学校での三年間に精力的に多くの著作を残している。

### 三、卒業生たちの証言

壁面のパネル展示では、横浜専門学校での語学の授業や教員に関わる証言も紹介した。内容は、当時の学生新聞に掲載された同時代の記事、卒業後に同窓会誌などに記された回顧、さらにこれまで資料編纂室が実施した、横浜専門学校卒業生へのアンケートの回答から抜粋したものである。その中からさらに数点を選び、卒業年次順で次に示す。

「面白かったのは英語の五味さん(商大教授)だったな。(中略)教室がざわつくと、ジタバタするねえ、ゴミがたあ：とね」岡山三男(一九三三年三月貿易科卒)『宮陵』第二十八号(一九

七九年三月)

「やはり、江本先生のストリクトガイダンスの賜で当時、私どもの中で、外務書記生とか、外務省の留学生試験に合格した数は東京外語につぐ成績を示しました」蒔田寿(一九三八年三月高等商業科卒) 同前

「空前絶後のあの猛烈な英語の時間は、多少大げさな表現が許されるならば、教室が天国と地獄に二分された感があった。前者の英会話は日々に進歩向上し、私たち後者からは、肩のこり目の疲れを訴える声が後を絶たなかった。出来るだけ体を縮めて先生と視線を合わさない努力に、全神経を集中したためである。試験の採点は予想に反して慈愛に満ち、追試験は私の知る限り皆無であった。」大西敏明(一九三九年三月高等商業科卒) 『宮陵』第二十九号(一九八〇年三月)

「支那語は第二外国語であり、私の予想したほどの授業時間がないため、支那語研究を主とし

た東和会に入部した。(中略)一学年の夏休み中、支那語の勉強に没頭し、自信満々で二学期に臨んだ」村橋三好(一九三九年貿易科卒) 『凸凹道七十七里』(私家版、一九九三年九月)

「江本ESSに属し、(中略)受講訓練のおかげで、北ボルネオ戦線豪州軍捕虜時代、役立ち戦後、最高裁家裁時代、フルブライト試験合格(教授研究員クラス)南カリフォルニア大学留学、専門領域の研究に従事できた」三輪誠(一九四一年三月貿易科卒) アンケート回答より

「貿易科という、当時にあつては、一種奇妙な印象を与える科があつて、私はそれに身を置いていた。支那語、独乙語、スペイン語を、英語のほかに教えていた。こじんまりと箱庭式にまとまりの好きな日本にあつて、この科の存在は、横専の特質を余すところなく露出してやまなかつた。一種のコスモポリタニズムがあつた。そして英語ときたら、横浜の他の専門学校が束になつても、敵わなかつたのである。」家坂三知雄(一九四三年

九月貿易科卒) 『宮陵会報』第十六号(一九六七年十二月)

「なんといつても江本教授のマシガンガンオブイングリッシュです、学徒動員で二年半しかおれませんでした、おかげで復員後(昭二十二)も英語教師昭和五十七年退職後通訳として県庁嘱託、平成七年〜平成二十年県警本部国際対策専門員、法廷通訳等々させていただきました」米津洪志(一九四三年九月貿易科卒) アンケート回答より

「非常に厳しい戦時統制下、自由な教育環境にあったのではなかったが、英語、第二外語(スペイン語)時間数が多かったし、外人(日本帰化、東湖繁氏<sup>9)</sup>)教授もいた。朝比奈宗源(倫理)、長谷川松治(英語)、斉藤(貿易政策)教授は授業時間中、日本の敗戦を明言していたのが印象に残っている。」谷脇清(一九四四年九月貿易科卒) アンケート回答より

「戦後商業英語で三浦教授からきびしく発音を

直していただいたことを思い出す」前田達夫(一九四七年三月経済科卒) アンケート回答より

「ESSに所属し、先輩各位から実践的英会話の修得に没頭したものです(後日、慶大経済学部に入學し、GHQの通翻部でアルバイトができました)」高木英雄(一九四六年三月経済科卒) アンケート回答より

「昭和二〇年四月の入學ですが、当時英語は敵性語として排斥されていましたが試験に英作文がありました。又入學後、Nippon Timesを教材として英語の講義も受けました。」廣川三郎(一九四八年三月経済科卒) アンケート回答より

### おわりに

横浜専門学校の語学教育は、英語教育(特に江本茂夫)を除いてはこれまで調査研究がおこなわれたことがなく、その指導の実態はほとんど知られていない。今回の展示でも、資料と時間の制約からどうしても英語に比重が傾くものになり、語学教育の全体像を示し

されなかった。教科書など授業に関する具体的な資料は卒業生からの寄贈に頼っているが、特にフランス語に関する資料や証言が皆無に近く、実像をうかがうことが困難であった。また、記録が残されておらず全教員の担当科目、在職期間を明らかにもできなかった。ことに会話担当の講師は入れ替わりが激しかったように、外国籍の場合はその後の消息もつかみづらい。しかし一方で、これまで焦点が当てられなかった教員の中に、思わぬ人物を見出すこともあった。

また、現在資料編纂室では、神奈川大学、特に横浜専門学校時代にかかわる人物誌の編集を準備中であるが、横浜専門学校時代、実に多くの個性的な教員たちがこの場で人を育て、あるいは自らの青春のひとつこまとして通過していったことを、今回の展示を通して改めて確認することができた。今後も、展示だけで終わるのではなく、大学史の編纂にうまくつながるかたちで展示をおこなっていききたい。

#### 参考文献

1・「横浜専門学校に於ける英語教授の概況」『The Bulletin』

一四二号、英語教授研究所、一九三八年三月

- 2・「再び横浜専門学校の英語科について」『The Bulletin』一四三号、英語教授研究所、一九三八年四月
- 3・江本茂夫「横浜専門学校ニ於ル英語教授」『英語会雑誌』横浜専門学校英語部、一九三八年十二月
- 4・「横浜専門学校新入生の感想文」『The Bulletin』一五五号、英語教授研究所、一九三九年六月
- 5・高梨健吉「英語の先生、昔と今——その情熱の先駆者たち」日本図書ライプ、一九八五年十二月
- 6・「神奈川大学資料集」第二集 復刻 横專学報《下巻》、一九八六年二月
- 7・「神奈川大学資料集」第三集 復刻 横專学報《上巻》、一九八七年三月
- 8・出来成訓「横浜専門学校の英語教育」『日本英語教育史研究』六号、日本英語教育史学会、一九九一年五月
- 9・野中正孝「東京外国語学校史——外国語を学んだ人たち」不二出版、二〇〇八年十一月



表1・関連年表

年	横浜専門学校	社会一般
1928 (昭和3)	3月 横浜専門学校の準備段階として「横浜学院」設立、4月 授業開始。法学科は「外国語」として英語を3年間(特科生は随意)、商業経済科は「英語」として1年次に訳読・会話・英作文、2・3年次に訳読・会話・英作文・商業英語の科目が置かれる	
1929 (昭和4)	3月 横浜専門学校設立認可、4月 授業開始。法学科は1～3年次を通して「英語」が週4時数、商業理財科は1年次週8時数、2・3年次週7時数、また随意科目として「支那語」が各年次とも週2時数あり	
1930 (昭和5)	6月 商業理財科を高等商業科、貿易科に改編。第一外国語：英語、第二外国語：仏・独・支・西・露・蘭 7月 「横専学報」創刊号で英語部の抱負が語られる。この年5月より会話をプロジェクト講師、翻訳を松本秀教授が担当し熱心に活動	
1931 (昭和6)	11月 英語部が中央大学で開催の英語演説大会に参加、同 県下中等学校英語演説大会を主催(於 横浜貿易新報社講堂)	9月 満州事変
1932 (昭和7)	2月 「語学部で一番羽振のいいのが英語部である(後略)」(『横専学報』第11号)	5月 5.15事件
1935 (昭和10)	4月 校則改正。第一外国語：英語、第二外国語：英・支・西・仏・独。五味赫(ごみ あきら)教授が英語部部長となる 7月・12月 「支那語」(中国語)研究を中心とした「東和会」が夏・冬休み中の懸賞問題を発表	
1936 (昭和11)	4月 江本茂夫教授着任、英語部新部長となる(のち仏蘭西語部と独逸語部の部長も兼任) 7月 第一回横浜四専門(市立横浜商業専門学校・官立横浜高等商業学校・関東学院高等商業科・横浜専門学校)英語弁論大会に参加 同 東和会が会誌「東和」を創刊 10月 全国英語教授研究大会(於 東京文科大学)で江本茂夫教授が横専1年生40名に授業を演説し、参観大学や専門学校の教員ら数百名から拍手を受ける 12月 英文和訳、和文英訳、会話を独立せず一括して「英語」とし、原書購読を従来の英語の科目から経済学または法学の中に配置することとする	2月 2.26事件 11月 日独防共協定調印
1937 (昭和12)	2月 海軍兵学校の教官が来校、江本茂夫教授の授業を参観し絶賛する	7月 日中戦争勃発
1938 (昭和13)	3月 校則改正。第二外国語：これまでの英・支・西・仏・独から英語を除き、随意科目に「英会話特別指導」を加える(高等商業科および貿易科) 同 英語教授研究所の「The Bulletin」142号に「横浜専門学校に於ける英語教育の概況」掲載 7月 横浜四専門英語大会に高等商業科と貿易科から2名が参加 11月 英語部が第一回中等学校英語雄弁大会を開催 12月 英語部が「英会話雑誌」を創刊	
1939 (昭和14)	4月 工学三科(機械・電気・工業経営)新設、独逸語を必須科目とする 6月 西班牙(スペイン)語部、ペルーからの留学生と交歓会を開催 7月 英語部、横浜四専門英語大会に参加、「絶対に他の追従を許さぬ実力の程を示した」(『横専学報』第84号) 9月 英語部員22名が江本教授引率で関西を「英語行脚」、各訪問先で英語による即席演説をおこない賞賛を浴びる 11月 西班牙語部、ポルビアからの留学生と交歓会を開催	4月 横浜-パラボラ定期航路開く 9月 第二次世界大戦勃発
1940 (昭和15)	この年、高等商業科の「英語」は1・2年が週9時数、3年次は週8時数。「英文簿記」が3年次に1時数。貿易科の「英語」が1～3年次各9時数、「外国語」(支那語・西班牙語・仏蘭西語・独逸語より一語選択)が1・2年次は週5時数。「英文簿記」が3年次に2時数。法学科は1・2年次の「英語」が各週5時数、3年次4時数。工業経営科は「英語」が1年次週4時数、2・3年次3時数(3年次は「商業英語」を含む)、「独逸語」が1年次週3時数、2・3年次は2時数。機械工学科および電気工学科は「英語」が1年次週5時数、2・3年次週2時数。「独逸語」が1～3年次週2時数 2月 西班牙語部、メキシコ、ポルビアからの留学生と交歓会を開催	9月 日独伊三国同盟成立 12月 太平洋戦争勃発
1941 (昭和16)	この年度、仏蘭西語部に入部する新入生なく、週一度の会話特別指導会を開催するとして部員を募る	
1942 (昭和17)	4月 校則改正。第一外国語：英または支、第二外国語：第一が英の場合独・仏・西より、第一が支の場合は英 11月 英語弁論部、青山学院主催全国大学高専英語弁論大会に参加、3位入賞	
1943 (昭和18)	10月 教務委員会でスペイン語等を廃しマレー語を採用することが議題に上ることが決定に至らず	12月 第一回学徒兵入隊
1944 (昭和19)	4月 高等商業科を経済科、貿易科を東亜科、法学科を法政科に改称。東亜科の第一外国語(英または支)の毎週時数は3年間で17時数(1940年貿易科では27)	8月 学徒動労令公布
1945 (昭和20)	9月 占領軍により校舎接収、12月解除	8月 終戦、占領軍進駐
1948 (昭和23)	6月・7月 横浜専門学校宮院会主催の「横専英語会」が生徒募集の新聞広告を掲載 9月 横浜専門学校主催の英語講習会の会員募集新聞広告掲載	
1949 (昭和24)	4月 新制大学に昇格し「神奈川大学」誕生	

※略称について 英：英語、仏：フランス語、独：ドイツ語、支：支那語(資料として当時の呼称をそのまま用いています)、西：スペイン語、露：ロシア語、蘭：オランダ語

表2・展示資料一覧

番号	言語名	資料名・書名	編著・訳・作成者名 ※下線は横専語学教員	出版社・ 制作者名	年代	備考
1	英語	CONVERSATION FOR ALL OCCASIONS	EDITH DE GARIS、 <u>江本茂去</u>	巖松堂書店	1938年4月	高等商業科1942年9月卒 鈴木静氏寄贈
2	英語	Present-day Economic Problems	<u>米本新次</u>	文修堂	1932年3月	高等商業科1938年3月卒 内海省事氏寄贈
3	英語	CHARACTER BUILDING THROUGH ENGLISH	<u>江本茂去</u>	荘人社	1938年4月	貿易科1942年9月卒 森島輝雄氏使用
4	英語	DRILLS IN ENGLISH COMPOSITION	<u>佐々木高政編</u>	荘人社	1940年3月	高等商業科1942年9月卒 鈴木静氏寄贈
5	英語	EMOTO'S RAPID ENGLISH COURSE	<u>江本茂去</u>	荘人社	1939年4月	貿易科1942年9月卒 森島輝雄氏使用
6	英語	Emoto's Vivid English	<u>江本茂去</u>	開拓社	1940年4月	貿易科1942年9月卒 森島輝雄氏使用
7	英語	高等即実和文英訳資料第一輯	小川忠蔵	荘人社	1940年3月	機械工学科1942年9月卒 服部初雄氏寄贈
8	英語	賞状 貿易科第三学年 井上照	<u>江本茂去</u> 他英語科教授6名、 <u>林頼三郎</u> 校長		1941年2月7日	貿易科1941年3月卒 井上照氏寄贈
9	スペイン語	DICCIONARIO DE LA LENGUA ESPAÑOLA 増補西和辞典	村岡玄	西班牙語学会	1940年6月	貿易科1944年9月卒 谷脇清氏寄贈
10	スペイン語	新撰西班牙語商業通信	<u>笠井鑽夫編</u>	外語学院出版部	1943年2月	貿易科1944年9月卒 谷脇清氏寄贈
11	ドイツ語	独逸語 "SATO" 試験問題	<u>佐藤恒久</u> か		1940年か	機械工学科1942年9月卒 服部初雄氏寄贈
12	ドイツ語	DER VORZUGSSCHÜLER 優等生	MARIE VON EBNER-ESCHENBACH / <u>伊藤武雄編</u>	三省堂	1939年11月	機械工学科1942年9月卒 服部初雄氏寄贈
13	ドイツ語	Eine Traumfolge 夢の絵巻	HERMANN HESSE / <u>井上正蔵編</u>	大学書林	1941年10月	機械工学科1942年9月卒 服部初雄氏寄贈
14	ドイツ語	IMMENSEE UND ANDERE SOMMERGESCHICHTEN	Theodor Storm / <u>馬場久治訳</u>	北星堂書店	1939年12月	機械工学科1942年9月卒 服部初雄氏寄贈
15	ドイツ語	実用初等独逸語読本	多田鐵雄	青木学修堂	1940年3月	機械工学科1942年9月卒 服部初雄氏寄贈
16	ドイツ語	LESETÜCKE MIT GRAMMATIK 初級独逸読本	青木一郎編	南山堂書店	1940年7月	機械工学科1942年9月卒 服部初雄氏寄贈
17	中国語	支那語教材	横浜専門学校		1940~1942年に使用か	貿易科1942年9月卒 森島輝雄氏使用
18	中国語	最新支那語教科書(読本篇)	<u>宮越健太郎</u> ・ <u>内之宮金城</u>	外語学院出版部	1936年4月	貿易科1938年3月卒 勝谷芳良氏寄贈
19	中国語	最新支那語教科書(会話篇)	<u>宮越健太郎</u> ・ <u>杉武夫</u>	外語学院出版部	1933年4月	貿易科1938年3月卒 勝谷芳良氏寄贈
20	中国語	支那時文教程	<u>宮原民平編</u>	文求堂書店	1940年4月	貿易科1942年9月卒 森島輝雄氏使用



(写真1) 英語部 (1938年) / 前列左から、五味赫、佐々木高政、亙理俊雄、江本茂夫、ヘンリー・マルコム、今井忠直、篠田成之、長谷川松治教授



(写真2) 西班牙語班 (1944年) / 戦局悪化による繰上げ卒業を迎えた学生たちと大林多吉教授 (中央・ネクタイ姿)



(写真3) 仏蘭西語班 (1944年) / 前列中央は久持義武教授、  
会場は伊勢佐木町にあった森永キャンデーストア

註

- (1) 「横浜専門学校々則拔萃」(神奈川県立大学資料編纂室蔵)(昭和六年または七年か)、『東京外国語学校一覽 昭和六年度』、『拓植大学百年史 資料編七』、『横浜高等商業学校規程』(『官報』第三千四百三十二号、一九二四年二月四日)より算出。資料編纂室職員齋藤研也の調査による。
- (2) 出来成訓は、横浜専門学校が、大学へ進学する者も少なくなかったにせよ社会に人材を送り出す「完成教育」の場であったゆえと強調する(参考文献8)。
- (3) 参考文献3、一頁
- (4) 参考文献2、二七頁
- (5) 「横專学報」第百一号、横浜専門学校雑誌部、一九四一年五月五日、三頁。ここで仏蘭西語部の学生は「東亜共栄圏内での佛蘭西語の果す役割は大きい」とその意義を説いている。
- (6) 一九四三年十二月二日教務委員会記録(『神奈川県立大学史資料集』第十一集(横浜専門学校会議録(二))、五一頁)
- (7) 収容所長時代の江本茂夫については、ナイジェル・プラン／川口好孝訳「捕虜収容所長 江本茂夫中佐」(『神奈川県立大学史紀要』第二号、二〇一七年三月)を参照されたい。
- (8) 「告別の辞」『横專学報』第百号、横浜専門学校雑誌部、一九四一年二月二十五日
- (9) 東湖繁 = Ernest Warrington Eastlake。一九四〇年から英会話を担当。言語学者 Frederick Warrington Eastlake の孫(履歴書による)。